

ハイデガーにおけるメタ存在論の意義

岡 田 悠 汰

序 問題の所在

本稿の目的は、ハイデガー(M. Heidegger, 1889-1976)の「メタ存在論 *Metontologie*」の試みを彼の思索の発展の中に位置づけることである。メタ存在論は、彼の主著『存在と時間』(1927、以下SZ)公刊直後の1928年夏学期講義『論理学の形而上学的始原根拠——ライプニッツから出発して——』(以下『ライプニッツ講義』)の補論(GA 26, 196 ff.)でしか主題化されていないにもかかわらず、多くの研究者の注目を集めてきた。それは、メタ存在論がSZにおける「基礎存在論 *Fundamentalontologie*」とともに、SZ公刊直後に明示的に唱導される「現存在の形而上学」の構想にかかわっているという発展的理由、そしてなによりもSZの後半部が刊行されず、予定されていたSZの構想が挫折したという事実によるだろう。しかし、そもそも「メタ存在論」という語が明示

的に語られたのは、『ライプニッツ講義』のみであり、SZの挫折にかんする議論も資料的な問題によっていまだ混迷を極めている事情ゆえに、依然としてメタ存在論の射程、およびSZまたは基礎存在論との関係について明らかになっていないといいたい(1)。SZとの関係については、一方でメタ存在論に基礎存在論の補助的な役割しかみないものもあれば(Vgl. 中川 [2018], 125 f.)、他方でSZからの連続性、必然性を主張する(Vgl. 轟 [2007], 131、田鍋 [2014], 13)、あるいはSZからの発展と解釈するものもある(Vgl. 景山 [2015], 159 f.)。メタ存在論の射程についても、あるものは1930年代半ばのいわゆる中期思想にまで射程がのびていると主張する一方で(Vgl. 轟 [2007], 131 ff.)、そもそもハイデガーはメタ存在論を遂行できなかったのだというものもある(Vgl. 仲原 [2008], 297)。こうしてメタ存在論をめぐる先行研究が群雄割拠している状況に鑑みれば、ハイデガーの思索の発展

史的研究を試みるものにとって、メタ存在論は避けて通れない問題である。

本稿の議論の手続きは、以下である。はじめに、ハイデガーのメタ存在論の内容を確認する(第1節)。その中で、基礎存在論が企投を重視したのに対して、メタ存在論は被投性を主題化しているのを示し、すでにSZ執筆時期において基礎存在論からメタ存在論への転換が想定されていたことを明らかにする。そのうえで、SZ以後に明言されるハイデガーの形而上学構想を検討する(第2節)。ここでは、基礎存在論とメタ存在論がハイデガーの形而上学構想の両輪をなしていることを確認したうえで、彼の形而上学構想がSZにおける現存在の被投的企投という二重性に端を発していることを明示する。このことを踏まえて、最後に基礎存在論からメタ存在論への転換によって、彼の思索がどのように変化したのかを示す(第3節)。このように、基礎存在論の「徹底化 Radikalisation」(GA 26, 200)を存在論的差異(存在者と存在の差異)の次元の深化として解釈し、メタ存在論を基礎存在論の必然的な帰結として位置づける。

第1節 SZ構想とメタ存在論

SZでは、現存在の存在了解を出発点にして「存在の意味 Sinn von Sein」を問う「基礎存在論 Fundamentale Ontologie」が唱導される。存在の意味は、現存在の「企投のそこへと向かう先 Woraufhin des Entwurfs」(SZ, 151)として、それによって存在が了解されるといういわば存在了解の可能性の条件で

ある。この存在了解の可能性の条件たる「存在の意味」として、現存在の「時間性 Zeitlichkeit」(SZ, 17)「そして存在一般の了解の地平である「時節性 Temporalität」(SZ, 19)を提示することがSZの目標であった。『ライプニッツ講義』においてメタ存在論は、基礎存在論の徹底化によって出てくるものであるといわれる(Vgl. GA 26, 200)。メタ存在論が問題とするのは、存在了解する現存在の実存を可能にする前提としてある「自然という事実的な手前存在」(GA 26, 199)である。この事実的な手前存在は、「全体における存在者」として主題化されるのである。この全体における存在者とは、現存在の実存に先立つてある存在者であり、ヴァーレンスの言葉を借りれば「なまの存在者 [existent bru] (Wachens [1971], 248)である。つまり現存在が、「世界内存在 In-der-Welt-sein」として自らの周囲世界の中で道具的な存在者とかかわる以前にあるはずの、ただ「ある」としかいいようのない純粋な存在者である。これは、我々の実存に先だつてあるものであるがゆえに、我々の力の及ばないところにあるものである。

ここに我々は、SZでは主題的に論じられなかった次元の「被投性 Geworfenheit」をみることができる。SZにおけるハイデガーは、現存在の「現 Da」には「被投性」と「企投」が属しているという(Vgl. SZ, 136/146/221)。企投は、先述のハイデガーによる存在の意味の規定から明らかなように、現存在の存在了解を可能にする次元にかかわり、現存在が自分自身を何らかの可能性のうちに投げ込むという仕方であら

われてくる。他方で、被投性とは現存在が世界のうちで何らかの可能性の中へと投げ込まれていることである。この被投性は、現存在がそのつど何らかの可能性のうちにある自分を見出す、現存在の事実性にかかわっている。被投性と企投は、概念的に相互に共属しており、ひねに「被投的企投」(Vgl. SZ, 148)としてある。すなわち企投は、現存在が被投的に与えられた一定の可能性の中から一つの可能性を選び取って自らを投げ入れていることとして生じる。被投性は、他方で、現存在が企投すること、ある可能性のうちに投げ込まれているという事態として生じる。この両者の事態は、相互に依存しており等根源的である。

さらに重要なことに、この現存在の「被投的企投」の根拠は「無性 *Nichtigkeit*」であるといわれる (Vgl. SZ, 284 f.)。すなわち被投的企投の根拠に目を向ければ、自分によって投げられたのではないという被投性の無性、他の可能性を選んではないという企投の無性が含まれている。周知の通り企投の無性と被投性の無性は、ともに自分の固有な存在をわがものにしていないという現存在の「頹落 *Verfallen*」という無性の根拠である (Vgl. SZ, 285)。¹¹⁾では被投性の無性に着目しよう。被投性に本質的に存する無性は、気づけば世界の中に投げ込まれて存在してしまっているということである。しかも、それは自分の意志によるものではない。このように、被投性の無性とは、自分自身の存在の根拠がわがものになっっていないという根拠の無性といえよう。現存在は、自分の存在の根拠をわがものにしていない、すなわち自分の「固有な

存在を根本から決して意のままに *mächtig* していない」(SZ, 284)。それゆえに、SZにおいては現存在の固有な存在の根拠は、固有な存在の可能性としての死へと「先駆する *Vorlaufen*」(SZ, 262)という仕方で企投の側に求められている。

つまり基礎存在論が、死という企投の極致を積極的に論じていたとすれば、メタ存在論は、現存在の被投性の極致であり、実存に先立っているがゆえに、現存在の力の及ばない全体における存在者を積極的に論じようとしている。換言すれば、基礎存在論は現存在の実存の次元における被投性を論じていたのに対し、メタ存在論はその実存を可能にする根源的な被投性を主題化している。したがって、メタ存在論は企投に重点があったSZの基礎存在論とは異なって、被投性に重点がある¹²⁾。このときに主題化されている被投性は、死すべきものとして投げ込まれた現存在が、自分の固有な可能性である死を引き受けるという「覚悟性 *Entschlossenheit*」(SZ, 270)ではない。メタ存在論が主題化する被投性は、SZでは現存在が決してわがものにできないといわれていた実存の根拠の次元での被投性であり、現存在が何らかの仕方ですでに引き受けてしまっている根源的な事実性である。ハイデガーがいうところの基礎存在論からメタ存在論への「転換 *Umschlag*」(GA 26, 199)の中では、存在了解する現存在の実存の前提である全体における存在者が主題化され、より根源的な被投性への重点の移動が起こっているのである。

しかしこのメタ存在論の構想は、SZ 公刊後にはじめて考案されたものでは決してない。SZ 執筆時期にあたる1926年

夏学期講義『古代哲学の根本諸概念』において、すでにメタ存在論への転換が示唆されている。

存在への問いは、それ自身を超越している。存在論的な問題が、転換する *umschlagen*。メタ存在論的 *Metamologisch*、神学的 *theologisch*、全体における存在者 *das Seiende im Ganzen* (GA 22, 106)。

この引用が端的に示す通り、SZの執筆期にすでにメタ存在論の構想があり、我々は、SZ以後に「現存在の形而上学」と名付けられるハイデガーの形而上学構想の萌芽をここに見出すことができる⁽³⁾。

第2節 「現存在の形而上学」の成立

前節では、メタ存在論の構想を概観し、ここではSZ公刊部で扱われていない次元の被投性が主題化していることを明らかにした。次に問題となるのが、基礎存在論とメタ存在論の関係である。すでに前節でSZの構想のうちにメタ存在論が含まれていることを明示した。周知のようにSZ以後にメタ存在論は、基礎存在論とともに「現存在の形而上学」(GA 26, 125/GA 3, 218)を構成するものとして呈示される。基礎存在論とメタ存在論の関係を明らかにするには、この現存在の形而上学という構想を検討しなければならない。本節では基礎存在論とメタ存在論が、ハイデガーの形而上学構想の中で、「存在—神論 *Onto-theologie*」としての形而上学の二重性

の捉え返しであることを確認し、現存在の被投的企投にその二重性があらわれていることを示す。

ハイデガーは、第一哲学としてのアリストテレスの形而上学が存在についての学と神的なもの(超力的なもの)の学という二重の性格をもっているとする(GA 26, 11 ff.)。この形而上学の二重性(いわゆる「存在—神論」)は、実存と被投性の二重性に対応すると述べており(Vgl. GA 26, 13)。⁴ SZにおいてこの実存は企投と等置されている(Vgl. SZ, 284)。つまりハイデガーが構想した形而上学は現存在の形而上学であり、その二重性は現存在に等根源的な企投と被投性に対応する。ハイデガーの形而上学は、この二重性にそくした基礎存在論(企投を重視)とメタ存在論(被投性を重視)の二つによって成り立っているといえる⁽⁴⁾。『カント書』では、この形而上学の二重性は次のように整理される。

第一哲学(形而上学)は、「存在者としての存在者についての認識」(*ōn tō ōn*)であり、存在者の優越した圏域(*ἐπὶ τὸν ἕνος*)についての認識でもある。この優越した圏域から全体における(*καθόλου*)存在者は規定されるのである(GA 3, 7)。

形而上学は、まず存在者を存在者として認識すること、つまり存在者を存在者として問うことである。存在者を存在者として問うということは、存在者を規定するものへの問いであり、それはすなわち存在者の存在への問い(存在論)である

ところ (vgl. GA 3, 222 f.)。そしてこの存在者の存在への問いというのは、SZ においてそうであったように、現存在の存在了解から出発した存在の意味への問いにつながるのである。さらにここでは、形而上学が存在者の優越した圏域の認識であるといわれている。この現存在の実存を越えた圏域から、メタ存在論が主題とする全体における存在者が規定されるのであり、このことは神という卓越した存在者からすべての存在者を規定する形而上学の神論的側面を示している。したがって現存在の存在了解を主題とする基礎存在論と、全体における存在者を主題としたメタ存在論が、存在―神論としての形而上学の二重の性格に対応していることを上の引用は明示している。このように形而上学としてハイデガーが構想する存在論は、基礎存在論とメタ存在論という等根源的な二つの探求によって成り立っている。そしてこれは、現存在における企投と被投性の等根源性によるものである。基礎存在論は、現存在が存在をどのように了解 (企投) しているのかということに焦点をあてているのに対し、メタ存在論は、存在了解の前提 (根源的な被投性) に焦点をあてたのであった。このように基礎存在論とメタ存在論において取り扱われる事柄は、相互依存のかつ等根源的である⁽⁵⁾。

ただしハイデガーは同時に、探求の手続きとしては、基礎存在論の問いがメタ存在論の問いに先行するという。

全体における存在者への、そして全体の中心圏域 *Hauptbezirk* における存在者への問いが、存在者そのものとし

ての存在者とは何か、を確実に把握することを前提とするかぎり、存在者としての存在者 (*ôv tōv*) への問いは、全体における存在者への問いの上位になればならない。存在者一般はそのようなものとして何なのかという問いは、全体における存在者の根本的な認識を可能的に遂行する順序の中で、第一のものである (GA 3, 222)。

したがって、SZ の構想にあった形而上学構想の萌芽は、基礎存在論からメタ存在論への転換によってはじめて、「存在―神論」を基礎存在論 (存在論) とメタ存在論 (神論) の両輪として捉え返す「現存在の形而上学」として結実するのである。

第3節 基礎存在論の徹底化とメタ存在論への転換

前節までは、ハイデガーのメタ存在論への転換、そしてそれによって基礎存在論とメタ存在論からなる現存在の形而上学の成立を見届けた。本稿の最終的な目的は、このメタ存在論への転換をハイデガーの思索の発展のうちに位置づけることである。本節では、メタ存在論への転換が、ハイデガーの思索にどのような意義をもちうるのかを明らかにしよう。

ハイデガーは、メタ存在論への転換が基礎存在論の徹底化であるといった。そこでメタ存在論への転換にかかわる基礎存在論の「徹底化」の内実を明らかにしなければならぬ。このさいに示唆的なのは、ハイデガーが SZ 第一部第三編の最初の仕上げの中で三つの差異を区別しようとしていたとい

う、ミュラーによる報告である⁽⁶⁾。というのもこの報告には、ハイデガーがSZの後半部で議論しようとしていた基礎存在論のさらなる展開が見られるからである。その報告によれば、ハイデガーはつぎの三つの差異を導入する。

a) 「超越論的 *transzendental*」差異、あるいは狭義の存在論的差異。すなわち存在者と、その存在者性 *Seiendheit* の区別。

b) 「超越態的 *transzendenzhaft*」差異、あるいは広義の存在論的差異。すなわち存在者およびその存在者性と、存在そのものの区別。

c) 「超越的 *transzendent*」差異、あるいは厳密な意味での神学的差異。すなわち神と、存在者、存在者性および存在の区別 (Müller [1964], 67)。

これらの区別が、ハイデガー自身に由来していることはすでに細川の指摘する通りである (Vgl. 細川 [1992], 242 ff.)。超越論的差異とは、端的に存在者と存在者が存在すること (存在者性) の区別である。他方で超越態的差異とは、存在者および存在者の存在を、存在そのもの、つまり存在の意味と区別することであるが、これは細川が指摘するように、ハイデガーのプラトン解釈から理解できる⁽⁷⁾。つまり現存在の存在了解を出発点にした存在の意味への問いは、存在者と存在を超越した存在の意味へと向かう探求であり、プラトンの「ウーシアを越えて」 *ἐν ἐπέκεινα τῆς οὐσίας*「善のイデア

への道筋に重ねられるものである (Vgl. 細川 [1992], 222 ff.; 細川 [2000], 71 ff.)。同じく『ライプニッツ講義』においてこの善のイデアにそくして、周囲世界の目的論的連関が行き着く先である「何のために *Worum-willen*」として開示される現存在の実存が論じられてくる (Vgl. GA 26, 237 f.)。ことに鑑みれば、超越態的差異とは蓋し、存在者および存在者の存在と存在の意味にかかわる現存在の実存を区別することであろう。この区別は、道具的存在者の「手もことにある *zu-handen*」というあり方と、現存在の実存の区別としてSZにあらわれているのである。

超越論的差異と超越態的差異がSZのうちに見出せることを踏まえたうえで問題となるのが、超越的差異である。存在者および存在者の存在、存在の意味から神を区別していることからわかるように、これは存在論と神論という形而上学の二重性に対応する。我々がみてきたように、SZの構想のうちにすでに現存在の形而上学の萌芽を見出しうるのであり、超越的差異は、存在論に対応する基礎存在論の主題 (存在の意味) と神論に対応するメタ存在論の主題 (全体における存在者) のあいだの差異をあらわしているといえる⁽⁸⁾。したがって、我々はこの三つの差異のあいだに超越論的差異から超越態的差異、そして超越的差異への進展をみることができるのではないか。SZの基礎存在論は、現存在の分析を通して超越態的差異 (道具的存在者の存在と実存の差異) へとたどり着く。そしてその先には、実存と実存の前提となる全体的な存在者の差異があり、メタ存在論はこの差異を主題化する

る。基礎存在論の徹底化によるメタ存在論への転換は、この差異の探求の進展にはかならない⁹⁾。存在と存在者の差異が、SZ 刊行直後の 1927 年夏学期講義『現象学の根本諸問題』ではじめて「存在論的差異」として用語化されたこと (Vgl. GA 24, 22) ¹⁰⁾ の差異の探求の進展という観点から理解できる。差異の探求の進展は、最終的に現存在の形而上学へといたるのであり、このとき現存在は被投的企投の等根源性に端を発する形而上学の二重性を担うと同時に、存在論的差異を遂行するものになるのである¹¹⁾。この差異の遂行は、SZ 以後に「超越 [Transzendenz]」の問題として主題化されることになる。

かくして基礎存在論の徹底化が、差異の探求の進展として解釈された。では、ハイデガーの存在の問いは、この進展によってどのように展開するのだろうか。これを考えるさいに、仲原による SZ 内部にある問題点の指摘が役に立つ (Vgl. 仲原 [2008a], 209 ff.)。仲原が問題視していることを端的にいうならば、現存在の存在の意味としていわれる「時間性」の様態 (本来の「非本来的時間性」と存在一般の了解の地平図式 (存在の意味) である「時節性」の開示をハイデガーが連動させてしまっている点である。ハイデガーは、現存在が自分の固有な存在をわがものにしていないあり方である頹落を非本来的なあり方とみなしているが、この頹落は現存在の怠惰によるものではない。すでに第 1 節で述べたように、被投的企投の無性には頹落の無性が含まれていたであり、この頹落の無性は被投性の無性に基づいているのであった。ハイ

デガー自身も、頹落と被投性を結び付けて論じている (Vgl. SZ, 175 ff.)。すなわち頹落あるいは非本来的なあり方は、現存在の存在の開示性に由来している。他方で現存在は、自分の固有な存在の可能性である死へと先駆し引き受けることで、自分の固有な存在をわがものにした本来的なあり方を獲得する。こういった現存在の本来の「非本来的な実存の様態は、本来の「非本来的時間性」に対応している。したがって、現存在の非本来的なあり方から本来的なあり方への「実存的変容 existenzielle Modifikation」 (SZ, 130) は、非本来的時間性から本来的時間性への変化でもある。

ではこのとき、現存在の実存の様態に対応する「本来の「非本来的時間性」と、存在一般の地平図式であり存在の意味である「時節性」の関係はどうなるのか¹²⁾。存在の意味は、現存在の「企投のそこへと向かう先」 (SZ, 151) として、それによって存在が了解されるところといわば存在了解の可能性の条件であるということを感じ起こせば、存在の意味それ自体は、現存在の実存の様態およびそれに伴う存在了解に先立っているものであり、本来性「非本来性の区別とは独立しているといえる。他方で、存在の意味の解明というハイデガーの企図のために現存在が本来的なあり方になることに鑑みれば、次のように考えられる。すなわち時節性それ自体はつねに自らを開示しているが、現存在の実存の様態に應じて、本来的な現存在にとってはそれが開示された時間性 (本来的時間性)、非本来的な現存在にとってはそれが隠蔽された時間性 (非本来的な時間性) としてあらわれる。ところがこう考

えるならば、現存在にとって存在の意味である時節性が開示されるかどうかは、現存在の実存の状態で依存することになってしまう。現存在の頽落は、現存在の存在の開示性によるのであって、現存在自身が選んだ結果（現存在の怠惰）ではない。したがって、このばあい存在の意味である時節性が開示されるか否かは、時節性自身によるものでなければならぬだろう。しかしともすれば、現存在が関与することなく、ただ時節性が開示してくるのを待つばかりとなり、死へと先駆する意味はなくなってしまう。つまり頽落が現存在の存在の開示性によるという前提では、時節性の開示と隠蔽に連動して、本来の「非本来の時節性が成立しなければならぬし、そこに現存在が関与する余地はない。

以上が仲原の指摘するSNの問題点であるが、仲原はこの問題に対する解決策も示している（Vgl. 仲原 [2008a], 306 f.）。このときに重要となるのは、時節性が自らを開示すると同時に隠蔽すると考えることである。すなわち時節性は自身のすべてを開示するわけではなく、つねに隠蔽している部分をもつ。本来的な現存在は、時節性の開示とともに隠蔽を隠蔽として見て取ることができる（本来的な時節性のうちにある）。この隠蔽は、まさしく現存在に構造的に組み込まれている頽落である。他方で非本来的な現存在は、時節性の開示どころか隠蔽も隠蔽として見て取ることができない（非本来的な時節性のうちにある）。こう考えることで、頽落が現存在の存在の開示性に属しているということを維持しつつ、時節性と時間性を連動させずに現存在が関与する余地を残すことがで

きる。

仲原は、SNが孕むこの困難ゆえに基礎存在論からメタ存在論への転換を遂行できなかったとし、¹¹¹にSNの挫折を見て取る（Vgl. 仲原 [2008a], 333）。しかし仲原が指摘したSN公刊部での問題から、SNの構想の挫折を直ちに引き出すことができるのだろうか。ハイデガーのメタ存在論は、構想にとどまり展開されることはなかったのだろうか。本稿がすでに明らかにしたように、SNの構想の中にはすでに基礎存在論からメタ存在論への転換が含まれていたものであり、差異の探求の進展として解釈された基礎存在論の徹底化によってこの転換が遂行されていたのであった。ここで我々は次のように考えることもできるのではないか。すなわち、仲原が指摘した問題は、まさしくメタ存在論への転換の遂行によってそれが問題として明らかとなるのであって、メタ存在論への転換を妨げるものではないと。確かに仲原の指摘した問題は、SN公刊部のみに限定すれば大きな困難として浮かび上がってくるかもしれない。しかしメタ存在論への転換を含むSN構想を視野に入れるのならば、この判断は尚早である。

仲原が問題視したのは、現存在が「先駆的覚悟性」を通して存在の意味である時節性へとアクセスできるということと、現存在が構造として頽落しており、時節性が開示するか否かは時節性自身によらなければならないことの両立可能性である。さて、現存在が「先駆的覚悟性」によって時節性へとアクセスできるようになるということはすでにSN公刊部で扱われたとして、現存在の構造としての頽落は、じつの

ところ SZ 公刊部では十分に扱われていない。すでに我々がみたように、現存在の構造上の頹落は、被投性の無性（根拠の無性）によるのであるが、これを主題化したのがメタ存在論であった。すなわち、現存在が時節性へとアクセスできる（企投に関係）ということと、現存在が構造的に頹落しているということ（被投性に関係）の両立は、基礎存在論の徹底化によるメタ存在論への転換を通じて現存在の形而上学によって、可能になっている。したがって、基礎存在論を徹底したメタ存在論の立場から見て、SZ 公刊部の基礎存在論が不徹底なものだと指摘することはできるが、SZ 構想の全体に目を向ければ、それは SZ 構想の内部にある問題ではない。実際ハイデガーは、SZ 以後に、現存在が実存的に変容すること、隠蔽を隠蔽として見て取ることができるようになるという議論を展開している。この思索の発展の中で、SZ では現存在の実存の形態と連動しているかのように扱われていた「存在の意味」が、SZ 以後では現存在の実存の形態とは独立に、常に開示と隠蔽の相互対決としてあらわれる「存在の真性」に置き換わるのである⁽¹²⁾。

結語

メタ存在論への転換によって、全体における存在者を主題化することによって被投性へと焦点があたり（第 1 節）、現在の被投的企投の等根源性によって来た基礎存在論（企投）とメタ存在論（被投性）の両輪からなる現存在の形而上学が成立する（第 2 節）。この転換は、存在論的差異の探求の進

展として解釈された基礎存在論の徹底化によるのであり、SZ の「存在の意味への問い」から SZ 以後の「存在の真性への問い」への展開を予告している（第 3 節）。むしろこの転換のうちでは、基礎存在論への批判的なまなざしが向けられ、存在の意味は無条件に開示するものではなく、開示と隠蔽の対決として歴史的に生起する存在の真性として捉えなおされる。しかし、このことは決して SZ の挫折を意味しない。ハイデガーは、メタ存在論への転換によって、SZ 公刊部で予告されていた「伝統的な存在論の歴史の解体 Destruction」という課題（Vgl. SZ, 19 ff.）を遂行することができるのであり、須藤のいうように壮大な循環を孕んだ仕方（Vgl. 須藤 [2020], 90）¹³、この解体は SZ の基礎存在論へも向けられるのである⁽¹³⁾。したがって SZ 公刊部の議論は、SZ の構想段階から潜在的であれハイデガー自身の批判にさらされる運動だったのであり、彼はその運命に従っただけである。

【註】

(1) こうした状況は丸山が指摘する通りである（Vgl. 丸山 [2013]）。

(2) メタ存在論が被投性を重視しているという指摘は、すでに多くの研究がしている（Vgl. 田鍋 [2014], 217 ff.; 中川 [2017], 124 ff.; 丸山 [2013], 110 ff. など）。さらに安部は、全体における存在者を問題にすること、現存在の「現」の究明を重ねている（Vgl. 安部 [2002], 74）。「現」に企投と被投性が属していることに鑑みれば、基礎存在論では現存在の存在了解、すなわち「現」の企投の側面が重点的に探

求されており、メタ存在論では全体的な存在者、すなわち「現」の被投性の側面が主題化されているといえよう。

(3) 細川は、当初SZの構想そのものにメタ存在論への転換を見出すことはできないと主張していたが(Vgl. 細川[1992], 287)、それは『古代哲学の根本諸概念』を扱っていないことに起因する。実際に細川の後の研究では、『古代哲学の根本諸概念』を扱ったうえで、ハイデガーのプラトン・アリストテレス解釈と形而上学構想を関連付けて、SZの構想の中に形而上学構想と同型のものを見出している(Vgl. 細川[2000], 38; 細川[2008], 21)。しかし、それでもなお細川は、SZのうちにメタ存在論の構想が含まれないという立場を固持している(Vgl. 細川[2008], 28 anm. 24)。細川の解釈の背後には、1926年にSZが大幅に書き換えられたということに対する解釈があるが、本稿ではこの問題を扱うことはしない。細川が重視しているのは、SZと1927年夏学期講義『現象学の根本諸概念』では「哲学＝存在論」という等置がされているということ、そしてメタ存在論への転換は「あるものから離れて別のものへ」(GA 29/30, 59)の転換であり、存在論とは別のものへの転換であるということである。しかし、メタ存在論への転換が、存在論とは別のものになるという解釈に本稿は賛同しない。確かに、メタ存在論は「形而上学的存在者論 metaphysische Ontik」(GA 26, 201)と名指されているが、全体における存在者を主題化するメタ存在論も存在論の圏域のうちにある。したがってメタ存在論への転換は、SZの構想の内部での基礎存在論(現存在の実存論的分析論)からメタ存在論という別のものへの転換であると解釈すべきである。その点で、本稿はSZのうちにもメ

タ存在論への転換の動きが予告されているという仲原の解釈に賛同する(Vgl. 仲原[2008a], 262 f.; 仲原[2008b], 4 ff.)。仲原が論拠とするのは、「問いがそこから発源」『*ein-springen*』そこへと打ち返す *zurückschlagen*』(SZ, 38/SZ, 436)というSZでの表現と「存在論がそこから出発したところへと打ち返す内的必然性」(GA 26, 199)が同一の表現であり、かつ内容としても対応しているということである。仲原がいうように、SZ公刊部の最終節で存在論の存在的基础を問題としているのであり、全体における存在者という現存在の実存の存在的基础を問題とするメタ存在論への問題意識があらわれているといつてよい。細川は、こうした仲原の解釈に反論を加えている(Vgl. 細川[2008], 29 anm. 25)。細川は、存在論が打ち返すべきとしての存在論の存在的基础と、メタ存在論で問われる現存在の実存の前提となる事実的な手前存在の次元にギャップがあると主張する。しかし管見では、SZ以後のメタ存在論への転換の遂行の段階にあつてはじめて、存在論の存在的基础という問題が実存の前提としての全体における存在者の問題として先鋭化するということは、SZの構想の中にメタ存在論への転換が含まれているということと両立しうる。細川の解釈には、轟が批判を加えているが、本稿もその批判に同意する(Vgl. 轟[2007], 355)。轟や田鍋は、より積極的に基礎存在論とメタ存在論からなる形而上学構想をSZの構想を同一視している(Vgl. 轟[2007], 131 f.; 田鍋[2014], 13 anm. 4)。しかし田鍋は、メタ存在論はSZの当初の計画を越えるものになっていると主張する(Vgl. 田鍋[2014], 126)。一方景山は、より穏当にSZの構想の中に後の形而上学構想の萌芽

を見て取るにとどまっている。本稿は、SZの構想のうちにメタ存在論が含まれていたことは疑いなきこととしつつも、ハイデガーが「現存在の形而上学」を積極的に打ち出しているのがSZ以後ということを重ね受け止め、SZの構想のうちに形而上学構想の萌芽があると主張する景山に従う。

(4) 同様の指摘は、細川や轟もしている (Vgl. 細川 [1992], 291や轟 [2007], 132 ft.)。

(5) 細川もまた、ハイデガーによる基礎存在論（存在者としての存在者への問い）とメタ存在論（全体における存在者への問い）が、互いに基礎づけ合い円環構造をなしていることを指摘する (Vgl. 細川 [1992], 310 ft.)。このことに鑑みれば、メタ存在論に基礎存在論の補助的な役割しかみない中川の解釈 (Vgl. 中川 [2018], 125 ft.) は、退けられる。

(6) 論者は、公刊されなかったSZ第一部第三編がどのようなものになりえたのかということにかなする見解をいまのところもっていない。したがって、本稿ではSZの未完という問題に踏み込むことはしないが、SZ第一部第三編「時間と存在」を再現する試みは、例えば細川や仲原、轟の研究がある (Vgl. 細川 [1992], [2008]、仲原 [2008a], [2008b]、轟 [2007])。

(7) 三つの差異のうち、超越論的差異と超越態的差異の解釈にかなしては、細川の解釈に賛同する (Vgl. 細川 [1992], 242 ft.)。

(8) 細川は、我々がSZ執筆期のメタ存在論の構想を確認した「古代哲学の根本諸概念」におけるハイデガーの善のイデア解釈のうちに、ミュラーの報告した三つの差異と同型のものを見出している (Vgl. 細川 [2008], 52 ft.)。

(9) マリオンによる存在論的差異の3つの区別も、ミュラーの報告に対応する。マリオンは、ハイデガーの存在論的差異を、意識と実在の差異 (Vgl. Marion [1989], 183)、「現存在と非現存在の存在様式の差異 (Vgl. Marion [1989], 187)」、そして存在と存在者の存在論的差異 (Vgl. Marion [1989], 191)に区別する。グレーシュは、存在論的差異にかなするこのマリオンの議論をミュラーの報告と関連付けて、SZ以後のマルブルク講義を、SZにおける存在論的差異の議論を洗練する試みとして再読する (Vgl. Greisch [2007], 473 ft.)。

(10) グレーシュは、SZ以後のマルブルク講義から、現存在が存在論的差異の真の担い手としてあらわれているという (Vgl. Greisch [2007], 475)。

(11) 本稿では、議論に必要な限りでのみ「時間性」および「時間性」を扱う。本来「時間性」にかなする議論は、『現象学の根本諸問題』を含めて議論をしなければならぬが、本稿の議論および仲原の議論を理解するうえでは、「時間性」が実存の様態の差異に対応しているのに対し、「時間性」は実存の様態の差異に中立的であるという前提が共有されねばならぬ。詳しい議論は、仲原の研究に譲る (Vgl. 仲原 [2008], 176 ft.)。

(12) この展開は、例えば1931/32年冬学期講義『真性の本質について』におけるプラトンの洞窟の比喩解釈に見て取れる。これについては、拙論を参照 (Vgl. 岡田 [2021])。

(13) マリオンは、存在論的差異のみが存在論の歴史の解体を可能にするという (Vgl. Marion [1989], 163)。第三節でみたように、基礎存在論の徹底化は差異の探求の進展として行われるのであり、その過程の中で現存在が存在論的差

異の遂行者として明確化されるのであった。したがって、基礎存在論の徹底化によるメタ存在論によってはじめて存在論の歴史の解体をすることができる。

【凡例】

ハイデガーの著作からの引用は、以下の略号を用い、括弧内に略号と頁数を併記して箇所を示す。ハイデガー全集については、略号とともに巻数を併記する。

GA = Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main:

Vittorio Klostermann, 1975-

SZ = Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 19 Aufl., 2006

【参考文献一覧】

- Greisch, Jean, *Ontologie et temporalité. Esquisse d'une interprétation intégrale de Sein und Zeit*, Ire éd., Paris: Presses universitaires de France, 1994 [ジャン・グレイシュ『「存在と時間」講義——統合的解釈の試み』、杉村靖彦ほか訳、法政大学出版局、2007年]
- Marion, Jean-Luc, *Réduction et donation. Recherches sur Husserl, Heidegger et la phénoménologie*, Paris: Presses universitaires de France, 1989 [ジャン＝リュック・マリオン『贈与と還元』、芦田宏直ほか訳、行路社、1994年]
- Müller, Max, *Existenzphilosophie im Geistesgen Leben der Gegenwart*, 3. Wesentlich erweiterte und verbesserte Auflage, Heidelberg: F. H. Kerle Verlag, 1964 [マックス・ミュラー『実存哲学と新形而

上学』、大橋良介訳、創文社、1974年]

Wachhans, Alphonse de, *La philosophie de Martin Heidegger*, 7. éd.,

Paris: Nauwelaerts, 1971 [アルフォンス・ド・ヴァーレンス『マ

ルティン・ハイデガーの哲学』、峰尾公也訳、月曜社、2020年]

安部浩『「現」——そのロゴスとエートス』、晃洋書房、2002年

岡田悠汰『イデアとアレテーア——ハイデガーの「洞窟の比

喩」解釈をめぐる』、日本哲学会 web 論集『哲学の門：大

学院生研究論集』第3号所収（31-43頁）、2021年

景山洋平『出来事と自己変容——ハイデガー哲学の構造と生成

における自己性の問題』、創文社、2015年

須藤訓任『「存在と時間」第2編評釈——本来性と時間性』、岩

波書店、2020年

田鍋良臣『始源の思索——ハイデッガーと形而上学の問題』、

京都大学学術出版会、2014年

轟孝夫『存在と共同——ハイデガー哲学の構造と展開』、法政大

学出版局、2007年

細川亮一『意味・真理・場所』、創文社、1992年

——『ハイデガー哲学の射程』、創文社、2000

——『時間と存在』、Heidegger-Forum Vol. 2 所収（16-43頁）、

2008年

中川萌子『脱底——ハイデガーにおける被投的企投』、昭和堂、

2018年

仲原孝『ハイデガーの根本洞察——「時間と存在」の挫折と超

克』、昭和堂、2008年 [[2008a] へ表記]

——『時間と存在』の再現』、Heidegger-Forum Vol. 2 所収

（1-15頁）、2008年 [[2008b] へ表記]

丸山文隆『ハイデッガーの思想における、基礎存在論からメタ

存在論への転換の内的必然性について」、東京大学大学院人
文社会科学系研究科・文学部哲学研究室論集（32）所収（104 -
117頁）、2013年